スポーツマンシップ憲章をもう一度みなおそう!!

一般社団法人日本キンボールスポーツ連盟
理事長　　高見　彰

キンボールスポーツの普及の柱としてスポーツマンシップ憲章が制定されているのをご存知の方は多くはないと思います。指導者資格が取得できる講習会か大会のパンフレットに載せているのを目にしたことがある程度の方が多いのではないでしょうか。しかし、プレーヤーをはじめとするキンボールスポーツに関わるすべての人々が守り、育てる大事な約束事です。

キンボールスポーツはなぜ楽しいのでしょうか。なぜ感動を呼ぶのでしょうか。なぜ皆を夢中にさせるのでしょうか。勝利するだけが成功であり、喜びであるなら、皆さんはこれほどまでにキンボールスポーツを必要としないはずです。また強くなること、うまくなることだけが目的であるなら、みなさんはこれほどまでキンボールスポーツに打ち込んだりしないはずです。

キンボールスポーツは他のスポーツと同様一人ではできません。いっしょに切磋琢磨する仲間がいて、同じ目標に向かってしのぎを削りあう対戦相手がいて、審判や応援してくれる人達、さらには環境を整えてくれる人達がいてこそ、はじめてスポーツとして成り立つのです。

そこには、自分自身の努力以外に、チームメートと築いた信頼があり、対戦相手への敬意がある。支えてくれる人達への感謝があるはずです。どのスポーツにもいえることですが、キンボールスポーツは普及を始めたときから、このことを大切にしてきたはずです。社会の中でキンボールスポーツがもっと理解され受け入れていただくには、プレーヤー自身をとりまくすべての人達への『信頼』『敬意』『感謝』の気持ちを形に表していくことであると考えます。私たちは日本体育協会が推進しているフェアプレー運動に賛同し、これを『あくしゅ』『あいさつ』『ありがとう』という具体的な行動で気持ちを表すことを日本中のキンボールスポーツ愛好者の共通の言語(ことば)としたいと思います。

私たち日本キンボールスポーツ連盟は、国内のキンボールスポーツにおいてスポーツマンシップを浸透させ、実践させる活動に力を注いで参ります。地域や学校でキンボールスポーツを楽しむ子どもや大人から、日本を代表するようなプレーヤーまで例外はありません。一人一人がスポーツマンシップを自分のことと意識し実践することで、キンボールスポーツは、子どもや若者を成長させ、彼らのまわりの人、彼らの住む地域を活気づけます。そして、きっと日本を元気にする力になると信じています。

第6回 キンボールスポーツワールドカップ 2011

本来ならば第6回キンボールスポーツワールドカップ2011は兵庫県宝塚市で2011年11月7日～14日に開催される予定でしたが、東日本大震災による放射能漏れの影響で中止となりました。その後、国際キンボールスポーツ連盟会議で急遽フランス・ナント市で10月25日～29日に開催することが決定しました。

今回は1年前に各チームのヘッドコーチを決め、ヘッドコーチを中心とした選考委員が、まず2010年の第11回キンボールスポーツジャパンオープン・チャンピオンズカップで候補選手を選出し、練習会や合宿などを行い技術や戦術を磨いてきました。そして、昨年7月に開催された第12回チャンピオンズカップにおいて各チーム12名の代表選手を選出し、ワールドカップに派遣しました。1年以上ヘッドコーチのもと練習を積んできたチームだったため、チームワークや意志の疎通はこれまでに比べて格段によくなりました。

大会は10月24日にオープニングセレモニーが開催され、25日～28日に予選、29日に決勝戦が行われました。試合は7分1ピリオドの3ピリオド先取制で予選3試合を行い、上位2チームが決勝へ。3位～5位が準決勝を行い、勝者1チームが決勝に進むという方式でした。参加チームは男子8チーム、女子7チーム。

女子チームは予選を2位で通過し決勝へ。男子チームはフランスと同率2位であったため2位決定戦を行い、大差でフランスに勝ち、決勝進出を決めました。女子チームの3位～5位の準決勝はフランス、ベルギー、スイスで行われました。これまでの実績でいけばフランスが3位になり決勝戦に進むはずでしたが、新興国スイスが勝者となり銅メダル以上が決定。その瞬間、スイスの女子チームだけでなく男子チームや関係者も抱き合って喜びを表していました。

女子決勝戦。日本チームは予選ではカナダから1ピリオドを奪ったものの、決勝戦ではカナダが連続3ピリオドを取り、優勝。どのピリオドもカナダと2ポイント以上の差がつき、力の差を見せつけられました。

最後に行われた試合が男子決勝戦。敗れはしたものの、王者カナダから2ピリオドを奪っての準優勝は今後の励みになる価値のあるものです。第1ピリオドを日本が取り、第2、第3ピリオドはカナダが、第4ピリオドは再度日本が取るというシーソーゲーム。カナダ、日本の応援団だけでなく観客を魅了する手に汗握る試合展開でした。第5ピリオドをカナダが取って試合終了。連続6回目の優勝を誇るカナダチームですが、近い将来歴史が変わるかもしれないと感じさせた試合でした。

日本チームのとった戦術は、カナダチームのディフェンダーにボールの近くで守らせないようにするために素早く何回も移動し、そこにできた隙をついてヒットするというものでした。ディフェンダーがボールの近くに位置すると日本チームの移動に合わせて移動しなければならず、動きが少しでも遅れると妨害したという理由で反則がとられます。そのためカナダチームのディフェンダーはボールの近くで守ることが難しくなったようです。1年前に連盟を設立したチェコ共和国から視察に来たマーティン氏は、日本チームの素早く何度も移動するプレーを芸術的だと称え、自分は日本チームのファンであるとも言っています。世界の人に感動を与えたプレーはヘッドコーチのもと時間をかけて練り上げた戦術であり、一人ひとりが切磋琢磨し身につけた技術でした。